

大分県JICA派遣専門家連絡会会報  
第18号



---

●森 宣	
アフガニスタンの美容院事情	1
-----	
●才 道 昭	
“The XIV International Seminar of Medical Education of CEMADOJA” (ドミニカ共和国) での講演を終えて	4
-----	
●城 生 朋 顕	
国際医学セミナーに参加して	7
-----	
●江 口 晋	
強敵・イモとの闘争	10
-----	
●青 座 麻 美	
壁を乗り越えたパナマ生活	12
-----	
●渡 辺 了 孔	
国際協力しらしんけん大分県	14
-----	
●事務局便り	17
-----	
●大分県 JICA 派遣専門家連絡会申し合わせ事項	18

---

---

---

## アフガニスタンの美容院事情

森 宣 (Hiromu Mori)

大分大学医学部放射線医学講座  
大分県JICA派遣専門家連絡会会長



---

アフガニスタンから大学院生（博士課程）として Dr. オメリが私の講座の一員となって3年経った。アフガニスタンではカブール大学医学部の外科講師であった彼は、来年学位審査を受けた後は、放射線診断学全般の勉強に没頭したいと計画している。あと2年足らずで帰国予定で、アフガニスタンで初めての放射線科医となり、アフガニスタンで初めての大学病院の診療科としての放射線科、大学医学部での放射線医学講座をひらくのだという気迫で毎日を過ごしている。アフガニスタン語で放射線医学の教科書をも書いている驚異的な人である（現代日本人には皆無なタイプといってよい）。奥様と子供3人を呼び寄せ大分市内に住んでいるが、日本での平和な日々は「まさに夢のような毎日だ」と夫婦で語り合わない日はないと言う。

先日、医局で教育・研究用画像データを整理していた Dr. オメリがさっぱりと散髪しているのに気付いた。私自身が生まれてこのかた理髪店で髪の手入れをしてもらったことのない人間なので（日本人のなかで何パーセントが理髪店あるいは美容院で他人の手で髪の手入れをしてもらったことのない人間なのだろうか。理髪あるいは美容院の全国組織があるのだったら是非聞いてみたいものである）、思わず尋ねてしまった。

私 「オメリさん、髪きったね、どこで散髪するの？ 自分でカットするの？」

オメリ 「センセイ、近所のバーバリーショップです。1000円です。」

私 「アフガニスタンでは散髪するの？ イスラム教徒の男性はヒゲは剃ってはいけないのでしょうか？（彼は敬虔なイスラム教徒である。毎年ラマダン（断食月）に4kgくらい減り、その後リバウンドで6kg増えるという。）」

オメリ 「アフガニスタンではもちろんバーバリーショップはありますし、日本みたいにヒゲを剃ってくれます。でも、頭や顔のマッサージはしてくれません。」

私 「（……そうか、理髪店ではマッサージもするのか。）奥さんはどうしているの？ 日本の美容院は高いでしょう。そもそもアフガニスタンではブルカで顔を隠さないといけないのだから、美容院はないのでしょうか？」

オメリ 「センセイ、いいえいいえ、アフガニスタンには多くの美容院がありますし、いつも大変混雑しています。」

私 「えー、そうですか！ブルカで体全体を隠すのに何故美容院が必要なの？」

オメリ 「センセイ、ブルカで隠さないといけないのは外出している時間だけです。結婚式や何かの集まりのときは、まず家で着飾ったうえにブルカを身につけ、道路を歩くときはブルカで顔と体を隠しますが、会場にはいると一斉に

ブルカを脱いで、日本や欧米と全く変わらない華やかな女性たちの饗宴となります。」

私 「ブルカって宗教上のしきたりなんですよ（愚かな質問であった）？」

オメリ 「センセイ、タリバンのせいなのです。オバマの決断により米国軍が撤退して、今は警察の数よりタリバンのほうが多い現状です。今でも自爆テロも多く、家内の実家の隣家が数ヶ月前に爆破されました。警察はあらゆる市、町の出入り口に検問を設け、車の一台一台をチェックしていて、とても車で遠出は不可能な状態です。学校も多くが破壊され、残されたビルで、午前、午後に分けてクラスが編成されて子供たちは学んでいる状態です。夜は電気がないので勉強できません……。」

話したら止まらない。彼の心底からこみ上げる憤りと憂国の情に私もただ耳を傾けるだけになる。タリバンがアフガニスタンの女性に禁じたことは数多く、学校で学んではいけない、化粧してはいけない、家の外で仕事をしてはいけない、公衆の場に出てはいけない、などなど。しかし、美容院へいくことは（まだ）禁じていないようである。

私 「オメリさん、本当にアフガニスタンに帰るつもり？（これも本当に愚問だった）」

オメリ 「新政府は全国民に ID を付すことを決定したが、数ヶ月経っても全く何もできずにいるのです。そのために国民はパスポートを取得できないのです。私は大学と政府、大使館の推薦のおかげでパスポートを持って、経済的にも両親から支援をもらえる幸運な人間です。この夢のような日本での生活で、私は多くのことを学んでいます。センセイが作った教育、診療、研究のシステムをアフガニスタンにそっくり取り入れさせてください。どんなに危険でも祖国に帰ってがんばります。」

しかし、この平和で何一つ不自由ない日本を

離れるのは、本人は良いにしても奥様と3人の子供たちはどうなのだろうか、と思わずにはいられない。アフガニスタンの美容院事情とともにいつか話を聞いてみたいと思う。私の家内が、化学薬品使用が主体なのだろうか、オーガニックな材質が使われているのだろうか、世界的なトレンドの情報はインターネットから得るのだろうか、韓国みたいに画一的な髪型をするのだろうか、アラブ人種にはカールした髪が一定の数が多いだろうがストレイトパーマにしているのか、と聞いてくれと矢継ぎ早に言う。毎日のようにテロで市民の死亡が報じられていて、宗教の面でも文化の面でも全く日本と異次元とされている国でも、女性の美容院に対する思い、位置づけは世界中の国と同じなのだと知りほっとするとともに、ここらあたりに国際平和、国際協力の糸口があるのかもしれないと漠然と思う。

医局の懇親会などで医局員と並んでグラスを持っている姿が Facebook に載り、数時間後に Facebook を見た彼の友人と彼の実の父親からアフガニスタンから激怒と叱責の電話があったという。アフガニスタンではアルコールは禁止である。この写真により彼の帰国後の活躍の期待は完璧に粉碎されるだけでなく、彼自身が犯罪人として扱われるという。即刻、Facebook から数枚の写真が削除された。アップロードした医局員は良き思い出のひとつこまという軽い気持ち（善意）でアップしたわけだが、危ういところで彼と家族の人生を破壊するところであった。インターネットで瞬時にして世界中が同じ情報を得ることができる現代ならではの国際事情である。

国際協力は、国と国、文化と文化、人種と歴史、財政基盤と社会的インフラ、政情の違いなどを把握していないと、なかなか成功には導かれない。バックにある組織が国なのか、NPOなのか、そのほかの非営利団体なのかによって

も、ストラテジーや具体的な方策、行動は全く違ってくるだろうし、プロジェクトの成果の定義そのものも大きく違う。しかし、国際協力に携わった人と人との直接の出会いは、短期的な成果を超越した細いながらも確固とした糸を作り、それを後世へ繋ぎ、それらが紡がれて大きなロープになるように思う。これから国際間の困難に直面することがあった時には、美容院はどこでも同じさ、と思うことにしたらどうだろうか。きっとポジティブな良い解決策が生まれるに違いない。

---

## “The XIV International Seminar of Medical Education of CEMADOJA”（ドミニカ共和国）での講演を終えて

才 道 昭

オフィス・ラジオロジスト



---

2014年7月26日にドミニカ共和国の首都 Santo Domingo で “The XIV International Seminar of Medical Education of CEMADOJA” が開催されました。今回、私（放射線科医師）と城生朋顕さん（放射線科技師）が講演する機会を頂き、7月23日から7月31日の日程で参加しましたので報告します。

私は2007年1月14日から3月12日の間、ドミニカ共和国での第三国研修に参加したもので、約7年ぶりのドミニカ共和国でした。今回は前回の約2カ月間の派遣とは異なり短期間の派遣であることや2度目とのことで、不安は少なく、非常に楽しみでした。また前回も城生さんと一緒であったため、コンビ復活で心強かったです。福岡国際空港 → 仁川空港 (Seoul) → JFK (New York) → Santo Domingo という長旅で疲れてはいましたが、Santo Domingo に飛行機から降り立った瞬間、日本とは違う雰囲気に包まれ、ドミニカ共和国へ再び戻ってきた胸が躍る想いと懐かしさでいっぱいでした。

今回、私が依頼された講演は、「1. 腹部外傷の画像診断（特に domestic violence）」と「2. 小児虐待の画像診断」の2本立てでした。ドミニカ共和国で最近、domestic violence と小児虐待は増加と残虐化で特に社会問題となっており、医療現場でも苦勞しているとのことでした。大分大学および県内の関連病院から多数の症例を頂き、シェーマを取り入れたりなどし

て、なるべくわかりやすく発表スライドを作成しました。大分では domestic violence に伴う腹部外傷の症例が非常に少なく、交通事故や転倒・転落などに伴う腹部外傷を用いて画像診断を解説しました。小児虐待に関しては大分でも最近問題となっており、小児虐待に伴う頭部病変と骨病変を中心に講演しました。非常に関心の高い内容であったこともあり、会場は席が足りないほどに参加者が多く、会場の雰囲気やその後の話しなどから反響がとても良く、達成感がありました。

素晴らしいスタッフの流出は痛手となりますが、CEMADOJA 放射線科医師は約7年前とほぼ変わらず、安心しました。このような seminar の開催や seminar では多数の CEMADOJA スタッフも講演しており、自覚を持ち、責任感も感じられ、うれしさと同時に今まで取り組んできたことの有用性が再認識できました。しかし、CEMADOJA スタッフの発表スライドはスペイン語のため内容はよく分かりませんでした。フォント・文字サイズの不統一やアンバランス、文字の羅列で単調なスライドや、引用した文献記載がない発表などスライド作成の際の細かい指導が必要と思われました。プロジェクターも高性能でなく、画像の細かい所見は会場の皆様には全く伝わらないのも残念でした。CEMADOJA スタッフのモチベーションの維持、読影や発表の向上、またこの



写真1 「腹部外傷と小児虐待の画像診断」講演  
(通訳；島崎マリさん)

体制をさらに発展するためには、今回のような講演など大分大学との密接な連携や情報共有、CEMADOJA スタッフ自身による相互スライドチェックシステムの構築などが必要と思われました。Seminar は大幅に遅くなりましたが、時間にルーズなのは国民性でもあり仕方がなく、特に大きなトラブルもなく、和やかな雰囲気ですべて終了しました。

今回の滞在中に2回、CEMADOJA を訪れましたが、機器の更新、患者さんの待合室の増築、建物外壁の塗り替えなどが変わっていました。しかし、以前約2カ月間、CEMADOJA で仕事していましたので、懐かしく思い、また、スタッフが陽気な性格で、前回と変わらず優しく接してくれたこともうれしく思います。

Santo Domingo は7年前と比べて、新しいショッピングモールやスーパー、高層ビルが増え、高級車も非常に増加し、かなり活気に溢れ、とても勢いを感じました（貧富の差は激しくなっているのかもしれませんが）。下調べをしていなかったことも問題ですが、ドミニカ共和国、特にSanto Domingoで、チクングニア熱が猛威をふるっていることを行ってから知りました。高熱、蕁麻疹、関節痛などの症状を引き起こし、熱が治まっても関節痛などは数か月から1年くらい続くこともあるとか。かなり深刻の状況で、蚊が媒介するので蚊に刺されないようにと注意がありました。日本では最近、デング熱やエボラ出血熱で社会問題となっており、国や個

人的にも徹底した対策を取っています。今回のドミニカ共和国訪問は、日本でデング熱やエボラ出血熱などの感染が問題となる前で、チクングニア熱などの感染症に対する恐怖や関心もかなり薄く（ほとんど無く）、私はもともと、蚊に刺されやすい体質にもかかわらず、特に何も対策を取らず、無防備の状態でした。幸いなことに、チクングニア熱にかかることはありませんでしたが、このような感染症が日本で問題となっている今となっては考えさせられます。

今回も一緒に派遣となった城生さんにはとてもお世話になりました。食事や買い物、観光巡り、様々なトラブル対処まであらゆることで助けてもらいました。その他にも、森教授の奥様の実家で美味しい料理を御馳走となり、優しい家族と笑いにあふれた時間を過ごすことができ、良い思い出となりましたし、通訳の島崎さんの娘さんにも観光案内と通訳をしていただき、仕事以外のことにおいても非常に充実した日々を送ることができました。心から感謝しています。

仕事、食事、大自然などを満喫でき、大分での日常では味わえない様々な刺激を受け、身も心もリフレッシュすることができました。滞り期間中また帰国後もずっと時差ボケに悩まされ寝不足が続いていましたが、現在は治り、今後の業務や研究活動に生かしていけたらと存じます。

最後になりましたが、ご指導いただきました森教授、貴重な症例を探し、提供して頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。



写真2 CEMADOJA スタッフと城生さん(左端)



写真3 よく食べて、よく飲んで。



写真4 海はすごくきれい！(運転手；ミロさん)

---

## 国際医学教育セミナーに参加して

城 生 朋 顕

大分大学医学部附属病院放射線部



---

### はじめに

ドミニカ共和国における医療プロジェクトについては、本会誌にて諸兄の先生方より度々紹介されていますので興味のある方は一読して頂ければと思います。

今回、2014年7月26日(土)に開催されました第14回 CEMADOJA 国際医学教育セミナーにおいて講演を行うため、久しぶりにドミニカ共和国の地を訪れましたので近況を含めて述べたいと思います。

### ドミニカ共和国とのつながり

これまで、私がドミニカ共和国を訪れたのは、2002年4月からの約1年間(医学教育プロジェクト)と2007年1月から約2ヶ月(中米カリブ地域対象画像診断技術向上プロジェクト)、2008年10月に3週間程度で(中米カリブ地域対象画像診断技術向上プロジェクト)今回で4回目、6年ぶりの訪問となりました。JICAが実施するプロジェクトとしての派遣は終了していますが、ドミニカ共和国と大分大学とのつながりは続いており、医学教育プロジェクト時に建てられたCEMADOJA(ドミニカ日本友好医学教育センター: Centro de Educacion Medica de Amistad Dominico Japonesa)の主催にて毎年国際医学教育セミナーが開催されています。



第14回CEMADOJA国際医学教育セミナー

今回の国際医学教育セミナーは2年ぶり14回目の開催となりました。場所はHOTEL BARCELO SANTO DOMINGOにおいて行われ、大きなテーマを「暴力による外傷と小児虐待の画像診断」として、いずれの講演もそれに関連した画像診断、治療を主体とした内容でした。大分大学からは、小児領域のスペシャリストである放射線科の才道昭先生と一緒に講演をされました。私は、診療放射線技師という立場から、CT検査を中心とした機器の変遷と小児領域におけるCT検査での放射線(X線)被ばくと画質との関係などの話を行いました。当初の準備の段階では、通訳を含む1時間程度の話想定していましたが、実際には、プログラムが盛り沢山な内容であったため、通訳を含めた30分程度の枠しかありませんでした。また、当日はセミナー開始時間自体が遅れて(海外ではよくあることなのかも知れません)、なおか

つ、講演内容を短くした分、十分に伝わったのか不明でしたが、頷いている人は居たように記憶しています。



第14回国際医学教育セミナーにて  
右から、加藤次長、モンテロセンター長  
淵上日本大使、才先生、筆者

また、国際セミナーと言うことで、私たち日本（大分大学）からだけでなく、メキシコ（社会保障専門病院21世紀メキシコ研究所）から Miriam Zabala 先生、Carlos Rodriguez 先生らの講師も招待されていました。こちらは、講演の言語が同じスペイン語ということもあり、講演中、講演後も活発な質疑がなされていました。

### セミナー前夜祭

医学教育セミナー自体は、ホテルで行われたため、CEMADOJAへ行く時間があるのか心配しましたが、ドミニカ共和国へ到着した翌日（セミナー前日）に訪問する時間を作ることができました。久しぶりで懐かしくもあり、どことなく新しく変わった部分（患者待合室の拡張や建物の色が白色からベージュ色へなど）もあり、警備の人に色々案内して頂きました。また、センターで働いている医師、技師はプロジェクトをしていた頃と殆ど代わっておらず、驚きとともに感心した次第です。

施設内を見学していると、事前の連絡もせず突然訪問をしたにも関わらず、偶然に Ortis 先生（放射線部長）と会うことができました。

そこで、通訳がない状態ではありましたが、私の拙いスペイン語と英語で話したところ、夜にワインを飲みながらセミナー前夜祭を開くので来ませんかとの内容のお誘いを受けました。

その晩、前夜祭へ行ってみると、会場はレストランの一角で行われており、ワインを飲みながら、セミナー当日の招待講演者であるメキシコの Miriam Zabala 先生が講演を行っておられました。今まで何回もCEMADOJAのセミナーは開催されていますが、前夜祭と称して勉強会を行っていることは知りませんでした。たまたま、前日にCEMADOJAを訪問したために、前日の勉強会へ招待して頂いたようでした。前夜祭と言いながら、活発な討論があり、勉強会というより、研究会のような感じを受けました。



活発なセミナー前夜祭風景

### ドミニカ共和国の近況等

最初に行った 2002 年当時からビルの建設等が盛んでしたが、それから、10 数年経つと近代的なビルがあちらこちらに建っていました。



旧プラサホテル付近の高層ビル

また、昔はプラサと呼ばれる小さな店が集まったショッピングモールがあちこちにありましたが、現在は、大きなショッピングビルが建ち、ブランド品から多様なレストランなどが入ったデパートのようなビルがいくつもありました。



デパート？内(アクロモール)

車は昔に比べて高級車が多くなり、以前の朝夕の渋滞の状態が日常的な状態となっているようでした。その渋滞緩和のために、近年設置された南北の地下鉄にプラスして東西の地下鉄が整備されていました。

ドミニカ共和国は、カリブ海のある島であることは、この会誌でも何度か紹介されていると

思います。リゾートホテルのプライベートビーチのデイパスを利用してのんびりする人も多い。



カリブ海（アマカホテルにて）

### おわりに

今回、短期間ではありましたが、久しぶりにドミニカ共和国を訪れてみると、どんどん発展しており、活気があることを肌で感じることができました。CEMADOJAもプロジェクト当初から比べると自助努力により、機器の更新や建物の拡張など様々に変化しており、時代に合わせ、風土に溶け込んだ医学教育センターとして中心的な役割を果たしていると感じました。日本との友好のセンターとして、JICAの継続的なサポートを期待するとともに、先進の医療技術の発展に更に寄与することを期待します。

ドミニカ共和国のことを次に見聞きするときにはどのように変わっているのか、楽しみと期待が多くなりました。またドミニカ共和国を訪れる機会があれば幸いに思う次第です。



第14回国際医学教育セミナーにて

---

## 強敵・イモとの闘争

江 口 晋

24年度1次隊 村落開発普及員



---

オーストラリアの北、インドネシアの西。大洋州と東南アジアとの境に位置するパプアニューギニア（以下、PNG）は、ニューギニア島東半分とその周辺の無数の島々を有する自然豊かな島国である（写真1）。国内には600とも



写真1 PNG国内地図 ウェスタン州は最西の南側

800とも言われる、おびただしい数の部族がそれぞれ固有の言語を用い、昔ながらの伝統を強く残して生活している。人々は日常において、至って温和で、話好きの、社交的で、友好的な人々である。その一方で、PNGは従来までタロ、ヤム、サツマモといった芋やバナナが主食であったが、輸入米の流入により、近年、米の消費が増えてきており、それに伴い需要も増加しているものと考えられている。こうした背景からPNGでは全国で小規模稲作の推進を試みており、私もその活動の一環として、インドネシアと国境を接するウェスタン州の州都キウン



写真2 キウンガ上空にて

ガ（写真2）に村落開発普及員、特に稲作の普及を主な要請として派遣された。配属先は郡農業普及センターで、付属の試験農場も備えていた（写真3）。



写真3 職場である農業普及センター  
自分を含め5名が務める

だが、当地での稲作普及には、(1)国民はイモによって当面の食料の心配がない、(2)PNGで

の粗放的畑作手法では稲作には不十分である、(3)米は高価であるものの中国人商店で手に入る、の3点により、なかなか農家の興味・関心を喚起することは、非常に難しかった。特に、(1)のイモは、コストもかからず、植えてしまえば手入れも少なくすむ、なので、米と比べられると、圧倒的にイモが選択されてしまう(写真4)。また、私が指導する上でも、日本と異なる



写真4 日常の食事 イモは豊富に収穫できる

る農耕慣習により、基本的な耕起や除草の重要性から指導しなければならず、限られた時間の中であって、克服すべき課題は多くあった。

活動内容としては、集落の巡回と試験上での農家対応(主に精米)であった。その間、接触する農家には稲作の状況や手法など、できる限りの情報収集と助言を行い、稲作推進につながるよう活動した。だが、配属先予算が2年間を通じて中央からうまく手配されず、巡回活動は



写真5 巡回 キウング近郊の農業訓練校

思うように進まなかったため、バイクやバスで届く範囲で巡回・指導を行った(写真5)。結果、2年間の成果としては、任期中の経験を小冊子様にまとめ、現地職員と後任隊員に残しておくことができた。できることならば、活動の中で多少関わった農家が、少しでも稲作を続けてくれることを切に願っている。

活動成果としては、帰国して振り返ってみると、様々な障害があった中で、自分でできる最低限度の事柄は終えたと思っている。だが、今帰国してみてPNGを眺めてみても、その前途多難さに気の遠くなるような気持ちである。が、PNGには今後、自らのことを自らで考え、将来のPNGのイメージを積極的に作り上げてもらいたいと心から祈願している。そして、自分にとってのこの2年間は、今後の人生で、普通では得ることのできない貴重な経験をする事ができた。この経験は様々な形で日本に還元していきたいと思っている。



写真6 交流 村落部の人々と 今後、PNGがより一層の発展を遂げますよう祈りつつ

---

## 壁を乗り越えたパナマ生活

### 青 座 麻 美

派遣国：パナマ  
隊 次：平成23年度3次隊  
派遣期間：2012年1月～2014年2月  
職 種：小学校教諭



---

#### ■ 青年海外協力隊としてパナマ国へ

パナマに派遣が決まり最初に思い浮かんだ事といえば、「パナマ運河」。正直それ以外のことが思い浮かびませんでした。それ以外にも、紳士用の正装として被られる「パナマハット」もありますね（のちにパナマハットはエクアドル産のパナマソウを使った帽子だということを知るので…）。

あえて予備知識を持たずにパナマという国で何に出会えるか、わくわくしながら2012年1月、日本を出発しました。空港から降り立った時には、今までに体験したことのないまとわりつくような湿気と熱気で、パナマに着いた——と実感しました。

#### ■ 私が派遣された小学校のこと

任地は首都にある市立のベリサリオポラス小学校でした。私が派遣された学校があるのは高層マンションやショッピングモールが立ち並び、比較的裕福な層が住む地域です。私立の小・中学校なども近くにあります。私の学校は、幼稚園から小学校6年生までの約600人（特別支援学級を含む）の園児・児童がいて、教員は理科、英語、家庭科や宗教も含め約40名いる、比較的規模の大きな学校です。

#### ■ ベリサリオポラス小学校での活動の様子

赴任されてから、日本の小学校での授業の方

法や、学校の様子などを知ってもらうために、研修会を積極的に開催しようと取り組みました。しかし先生方はあまり研修に意欲的ではありませんでした。パナマの先生方は、研修に参加するとポイントをもらえるという制度があり、それが給料に反映するため、長期休業中は研修に自ら進んで参加します。私達が取り組んだセミナーは、ポイントの対象外となり、なかなか参加してくれる先生がいませんでした。なによりも、言葉の壁が立ちばかり、先生たちと私の間の意識の違いが生じていました。その頃の私と先生たちとは、あまりいい関係ではありませんでした。今思うと、自分の意見をはっきり言えていなかったのです。どんなことを求めているのかという、先生たちの希望や、授業への取り組みなど、全体の様子をよく見ていなかったことも反省しています。時間が経ち、徐々にパナマの生活にも慣れ、スペイン語も少しずつ話せるようになると、遠慮せずに自分の意見が言えるようになりました。すると、相手も返してくれるようになり、少しずつ活動が変化していきました。2年間の活動の終わりに私がパナマ人の同僚の先生と主催した研修会には、30名もの市内の先生が参加してくれました。同僚の先生は、帰国した今でもメールでやりとりをし、教材の使い方を聞いてきたり、学校の様子を教えてくれたりしています。

## ■私のパナマ

おご  
驕らずに常に何かを学ぶという姿勢を教わった2年間だったように思います。

今では、パナマというと屈託のない笑顔で笑う先生や子供や家族を思い出す大事な場所になりました。



写真1 先住民族ノブグレ族のコミュニティーを訪れ民族衣装を購入



写真3 パナマ日本人学校において5,6年生、中学生の6名に体験談を話す。



写真2 研修会の際、自分たちで作った教材の前で修了証書の授与（CP：左から2番目）（教育委員会 研修担当：一番右）



写真4 CPのクラス、いつも元気に迎えてくれた子供たちと

---

## 国際協力しらしんけん大分県

### 渡辺 了 孔

派遣国：モンゴル  
隊 次：平成21年度3次隊  
派遣期間：2010年1月～2012年1月  
職 種：視聴覚教育



---

2012年3月から、6代目のJICAデスク大分の国際協力推進員として着任し3年間の任期の中で国際協力を推進してきました。大分県のJICAの窓口として、「どんな仕事をしているのですか」と良く尋ねられます。仕事の内容を書きますと、(1) 地方自治体・地域国際化協会等との連携(国際協力事業の連携と、広報啓発活動の推進)、(2) 開発教育(国際理解教育)の促進、(3) ボランティア応募相談及び協力隊OB会活動の支援、(4) ボランティア事業への都道府県民参加促進、(5) 研修員受入先の開拓支援及び地元との交流プログラム作成支援、(6) 専門家リクルートの支援及び帰国専門家連絡会活動の支援等となります。

今までの先輩推進員が、教員の経験が豊富な方々が多く、教育機関や学校へのつながりを強く持っていたこともあり、国際協力出前講座を授業や活動に取り入れてくださる学校や公民館が多いのが大分県の特徴です。学校現場への取り組みは引き継ぎながら、私がこの3年間で取り組んだことは、広く一般の大分県民(子供から大人まで)に、国際協力について知ってもらい、JICA(ジャイカ)の名前を広めるというものでした。私の取り組みをもとに紹介したいと思います。

まず、(1)の地方自治体・地域国際化協会等との連携事業として大きく3つのイベントに注力しました。まず一つは、10月の「おおいた

国際協力啓発月間」です(写真1)。これは大分市との共催で開催し、広く大分市民県民に向けて、大分市内各地で国際協力、国際理解、国際交流イベントを開催するというものです。



写真1 おおいた国際協力啓発月間内で開かれた「国際協力のプラットフォーム」

二つ目は、日田市公民館運営事業団との共催で開催している「ワールドフェスタ in ひた」(写真2)。日田市の小学生を対象に、外国(開発途上国)の衣食住の展示、青年海外協力隊・ALT・留学生との交流、スカイプによる途上国の子ども達との交流、アフリカのスポーツ「クバーラ」等による国際理解、国際交流の理解促進を行いました。三つ目は、大分県立図書館との共催で、図書館を利用する一般県民を対象に、青年海外協力隊がオススメする本の紹介と貸出(写真3)、青年海外協力隊体験談、映画上映会とトークイベントを開催しました(写真4)。



写真2 ワールドフェスタ in ひたの展示の様子



写真3 大分県立図書館での「本から広がるグローバル～青年海外協力隊がオススメする一冊～」

さる学校や先生方が多く、機会を数多くいただきました。ワークショップと言うと、どうしても博物館や美術館で行われるものだというイメージが強いのですが、国際理解にもしっかりとワークショップがあるのです。開発教育と言われる分野ですが、これらの教材については、開発途上国の人びとの立場を疑似的に体験したり、また開発側と途上国側に分かれて討議したりと、参加型の学習手法を用いて学ぶものです(写真5)。



写真4 大分県立図書館での映画上映会とトークイベントの様子



写真5 国際理解ワークショップの様子(途上国と先進国の格差を体験)

これらのイベントは、「グローバル」という言葉の広がりも手伝ってか、年々参加者や興味関心の幅が広がっているように感じます。(実際に参加者が増加しています)

次に(2)の開発教育の促進についてですが、先輩隊員の道しるべがあったこともあり、国際理解ワークショップを積極的に取り入れてくだ

国際協力の現場に立ったことのある方であれば、何度も直面する「答えのない世界」を、国際協力に携わったことのない方々に疑似的に体験してもらい、揺さぶりをかけます。国際理解ワークショップを体験した学生、教員、一般の方々は「もやもや」して「答えのない」ことに憤りを感じたり、悔しい気持ちを持った

まま言葉をなくす方もいます。これは、何が良くて、何が悪いのかというのは、それぞれの立場を替えると価値観が変わってくることに気付いたことによるものです。実はこの揺さぶりが大事で、これからの地球に住む一市民としての私達には必須の感覚だと思っています。

(3)、(4)の JICA ボランティアに係る応募相談や OB 会の支援等は、定常的に行っているものですが、大分県の面白いところは、大分県青年海外協力協会 OB 会が主催で月に 1 回開催している、協力隊経験者による個別相談会「協力隊ナビ」が活発なことです(写真 6)。



写真 6 大分県青年海外協力協会主催の個別相談会「協力隊ナビ」

私が推進員に着任した当初は相談者がいないということもありましたが、インターネットや Facebook での呼びかけ、デスクに相談に来た方々への案内など地道な PR が功を奏し、徐々に参加者が増え、最近では常連なる方も出てきました。協力隊には行かないかもしれないけれど途上国での体験を聞きたいという方、お子さんに是非とも行かせたいので話を聞かせてほしいという方も出てきました。これは、年齢、性別や職業の垣根なく受入れ、程よい距離感で人びとを巻き込む大分県の OB/OG のなせる技だと思います。本当に「ざっくばらんな」相談会が自慢です。そんな大分県の OB/OG たちですから、ラジオの番組への出演も積極的にしていただき、途上国の様子などを電波に乗せてお話いただきました。(写真 7)



写真 7 ラジオに出演する協力隊経験者

広く一般の方々への国際理解・協力へ取り組んだ 3 年間で感じたことは、思った以上に開発途上国のことを知らない方が多いということです。私達の生活は途上国と密接につながっていて、とても関わりが深いことをもっとたくさんの方々に知ってもらいたい。国際協力推進員の任期は 3 年間で終わってしまいますが、日常のありふれた生活の中で、世界とつながっているということを意識しながら、国際協力が当たり前の暮らしとなるよう、これからも国際協力の推進をしていきたいと思っています。

## 大分県 JICA 派遣専門家連絡会事務局便り

### 連絡会からのお願い

平素は本会に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。  
さて、会員の皆様にごお願いがございます。

本会はできるだけ多くの JICA 派遣専門家の方にお集まりいただきまして、  
各々時々の経験・ノウハウ等を伝えて頂き、それらを多くの JICA 派遣専門家  
の皆様と共有したいと考えております。

そのため、会員の皆様ならびに関係の皆様へ、ご意見ご報告を本会会報へ  
投稿していただけますようお願いしております。

また、JICA 派遣専門家連絡会の主たる機能となりました「国際協力に対する  
市民への理解促進活動」のため市民講座等での報告発表も会員の皆様にお願  
いしております。

しかしながら先般個人情報保護法が成立しました影響をうけまして、法施  
行後の JICA 派遣専門家の個人情報がまったく得られない状況にあります。

そこで、皆様のお近くに JICA 派遣専門家で本会への入会を希望されなが  
ら、本会から総会案内状及び会誌が届いていないという方がおられましたら、  
ぜひともお知らせいただけますようお願いいたします。

大分県 JICA 派遣専門家連絡会

幹事 中山 晃一

# 大分県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成14年3月1日制定)

## 1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び大分県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を集結して、前記の動向の有効な発展に質すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

## 2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係る事業を行う。

- (1) 政府開発援助(ODA)の進展動向に関する調査研究および提言
- (2) JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3) 大分県と海外諸国(特に発展途上国)との国際交流活動の促進、充実に質する諸活動
- (4) 会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること。

## 3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

## 4. 会長及び幹事

- (1) 会の運営を円滑に行うため、当会に会長を1名置く。また、世話役として2名、会計役として1名、計3名の幹事を置く。
- (2) 会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3) 幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当たる。
- (4) 会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5) 本会は必要に応じ会計監査役2名を定めることとし、総会の議を経て会長が委嘱する。
- (6) 本会に事務局長及び編集責任者を定め、会長が委嘱する。

## 5. その他

この申し合わせ事項を改変し、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、総会の議を経て施行する。

以上

## 付 則

この申し合わせ事項は、平成19年2月2日に一部改定し施行する。

この申し合わせ事項は、平成20年2月6日に一部改定し施行する。

この申し合わせ事項は、平成25年2月1日に一部改定し施行する。

## 編集後記

この度、会報第11号から17号までの編集を担当された大分大学医学部感染医学予防講座の江下優樹先生より、編集責任者を引き継がせて頂きました、大分大学医学部放射線医学講座の田上秀一と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

本会報は、会員の専門家のみならず国際協力をご経験の方々に広くご寄稿頂き、任地での国際協力の現状を会員の皆様で共有し、国際協力の今後を考えるきっかけとなるものと理解しております。これまでの編集責任者のご尽力によりまして、非常に充実した内容の冊子形式の会報の発刊が継続されています。今回編集担当の任を現会長の森宣教授より仰せつかり、重責を感じております。

本号におきましても、大分大学放射線科（現オフィスラジオロジスト）・放射線部の才先生、城生先生からのドミニカ共和国でのご講演および施設の訪問記、JICA青年海外協力隊1次隊の江口様にパプアニューギニアでの村落開発普及、青座様にパナマでの学校教育の海外協力について、さらにJICAデスク大分国際協力推進員の渡辺様には、ご自身の大分県内での国際協力支援・広報活動につきまして、多様な職種の専門家の方々にご寄稿頂きました。どの原稿を見ましても、様々な体験とご苦労、喜びなどを多くの写真を交えて詳細にご紹介頂き、読者にとりましても今後の国際協力を考える上で非常に刺激になる内容となっております。ご多忙中にもかかわらずご寄稿頂きました皆様には、この場をお借りしまして感謝申し上げます。

本誌の最後には、専門家連絡会事務局よりの申し合わせ事項を掲載しております。昨年の一部改訂がなされておりますので、どうぞご確認ください。

本会報は、皆様からの原稿により、冊子の体裁を維持し発刊されております。会員諸氏あるいは関係の皆様には今後も広く、随時原稿を募集いたしますので、専門家の派遣情報やご体験、あるいは関連のご経験やご意見をお持ちの方々は、下記までご連絡いただきますと幸いです。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

田上 秀一

大分県JICA派遣専門家連絡会会報編集責任者

連絡先：〒879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘1-1

大分大学医学部臨床医学系放射線医学講座

Tel：097-586-5934, Fax：097-586-0025

E-mail: stanoue@oita-u.ac.jp

---

---

## 大分県 JICA 派遣専門家連絡会会報 (第 18 号)

2014 年 12 月 10 日

編集および発行 大分県 JICA 派遣専門家連絡会  
会 長 森 宣  
編集責任者 田上秀一  
〒 879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘 1 丁目 1 番地  
大分大学医学部臨床医学系放射線医学講座  
TEL (097) 586-5934, Fax (097) 586-0025  
E-mail stanoue@oita-u.ac.jp  
印刷所 株式会社 電子印刷センター  
TEL (0977) 66-5365 FAX (0977) 66-5383

---

---